EPOCHMAKER

豊島区立男女平等推進センター(エポック10) 情報誌

えぽっく・めいかー

2006.3 NO.29

あなたの居場所はどこですか？
―女性センターからの受信・発信―

画・大滝 希美

『女性センター』は、何をしている所かよく分からない、何だか敷居が高い、などというイメージでうけとめられがちです。
今号は、『女性センター』が男女共同参画を推進する拠点施設として、より機能を高めるために必要なこと、求められる役割を探ってみました。

Epoch 10
限りない飛躍、可能性

◆『女性センターの役割を考える』
中央大学法学部教授/佐賀県立女性センター・アバンセ館長　広岡守穂さん　P2,3
◆「学生と語る～女性教育論を学んで～」大学生との座談会　P4,5
◆「あなたの居場所はどこですか？」区民企画講座報告　P6
◆ 住民意識調査の概要/男女共同参画苦情処理委員からのお知らせ　P7
◆ エポック10情報(「男女共同参画都市宣言記念」ロビー展示/18年度講座開催予定/相談のご案内)　P8

『女性センターの役割を考える』

中央大学法学部教授／佐賀県立女性センター・アバンセ館長
広岡守穂さん

女性センターは女性のエンパワーメントのための拠点

女性センターは女性のエンパワーメントのための拠点である。男女共同参画社会の実現に向けて、女性たちがネットワークを広げ、また女性の人材が育っていくのをバックアップする重要な拠点となるべき施設である。

女性センターがどんなことをしているかというと、つどう（活動や交流の支援）、伝える（情報発信）、学ぶ（学習・研修）、しらべる（調査研究）、ささえる（相談）、守る（女性の人権擁護）の６つの機能にまとめることができる。もちろん、このすべての機能をはたせばいうことはない。しかし多くのセンターは一部の機能を欠かしているだろう。スタッフや広さなどの制約があるから、それはそれで仕方がない。

とはいえ、つどう、学ぶの２つは、女性のエンパワーメントの拠点という意味からして不可欠の機能だと思う。エンパワーメントのためには、①実績をつくることと②ネットワークをつくることが重要だからである。

子育て中の女性の利用拡大

女性センターの利用者は多くが女性である。センターによって違いはあるが、中高年女性にかたよる傾向がある。また教養娯楽関係の講座の人気が高く女性学関係の講座は人の集まりが良くないなど、利用実態と施設の設置目的にズレがみられることも少なくない。しかしこういうことはあまり気にすることはないと思う。来てもらうだけで次のステップにつながるチャンスがある。来てもらえなければ、そのチャンスすらない。

ただし子育て中の女性の利用が増えるように、もっともっと働きかける努力をするべきだと思う。佐賀県立女性センター・アバンセでは、昨年、「ママチャレ」（子育てママのチャレンジ支援講座）を実施した。もちろん託児付きである。定員２０人のところ、あっという間に１０５人もの応募があって担当者はうれしい悲鳴を上げていた。子育て中の女性の利用者増はこれからの女性センターにとって大きな課題だと思う。子育て中の母親の利用が増えたら、それだけで大いによろこんでいい。その女性たちは、エンパワーメントのための最初の第一歩を踏み出したのである。

女性センターの講座

女性センターのほとんどは女性の学びのために講座を実施している。くらしに関する実用的なもの、趣味や教養などのカルチャー的なもの、意識改革をうながす啓発的なもの、起業や再就職に関するものなど多岐にわたる。まちづくりの課題に関する政策講座や、自分の考えや主張をきちんと伝えるためのアサーティブネスの講座や、フェミニスト・カウンセリングの講座もある。

最近では講座の進め方も工夫されていて、ワークショップやバズセッション[※1]など、新しい手法を取り入れた講座も増えた。ＫＪ法[※2]によるワークショップなど、まるで企業の研修のようである。一方的に講師の話を聞く座学のスタイルではなく、受講者が積極的に発言したり作業したりすることによって、実践的な能力を高める学習を進めていこうというスタイルである。

成果物・ロールモデル・キーパーソン

エンパワーメントのためには、受講者にきちんとした成果物を求めるのが有効である。あるテーマについて調査し結果を報告書にまとめるとか、イベントを企画運営するとか、ブックレットを刊行するとか、学習の成果をかたちにすることが大切である。調査をしたりイベントを実施したりすれば、かならずその過程でネットワークができる。成果を出せば実績になる。自信がつく。エンパワーメントである。

ただし成果物を要求する講座は、フォロー体制がしっかりしていないとうまくいかない。けっこうきめ細かなバックアップが必要なのである。

さらにもうひとつ。女性センターには女性を元気づける

女性センターとはどういうところなのか。なぜ必要なのか…。女性センターの役割をあなたもいっしょに考えてみませんか。

ロールモデルとキーパーソンが必要である。スタッフの中に、または講師やアドバイザーの中に、そういう人材がいなければならない。公営の場合、職員は3年ほどで入れ替わるから、どうしても知識や経験が蓄積しない。そういうスタッフだけだったらエンパワーメントの支援は十分にできない。

相談

相談事業も非常に重要である。女性センターの相談窓口には、夫の浮気、離婚、舅姑との関係、子どものこと、職場の待遇、再就職など、いろいろな悩みをかかえた女性たちが毎日のように訪れる。夫や恋人などからの執拗な暴力に苦しめられている女性のことを考えると、緊急の場合に対応することも必要だろう。

ただし相談体制がしっかりしているかどうかは、女性センターによってかなり差がある。相談事業を行っていても、ケース・カンフェレンスやスーパービジョン[※3]まで行っている女性センターはあまり多くないだろう。

重要なのは「男女共同参画の視点での相談」ということである。女性センターは女性の味方というイメージがあるから、DVやセクハラに苦しんでいる女性にとっては比較的信頼されやすい施設である。

女性センターの相談窓口は、いわば女性の人権侵害を感知するためのセンサーである。センサーが作動して次々と加害の実態が明るみに出れば、それをつうじて女性の人権侵害はじょじょに減っていくだろう。

なぜ女性センターが必要なのか

いま全国でおよそ800ほどの女性センターがある。なぜ女性センターなのか。

男女共同参画の時代なのだから、男性の利用も促進すべきだという声をよく聞く。そのとおりだともいえるし、違うともいえる。

男性の意識が変わってもらわなければ困るという意味では、たしかに男性の利用者を増やしたい。しかし男性の姿が多くなると、相談にやってきたDV被害女性は落ち着かないだろう。そもそも男女共同参画社会をつくるために必要なのは、女性のエンパワーメントなのである。男性優位の社会である以上、ハンディキャップをうめるため、女性のためのエンパワーメントの拠点は必要である。だから男性の利用者が増えることは二の次に考えていい。

いまの女性センターの課題は、子育て中の女性の利用を増やすこと、社会参画にむけた実践的な支援の方法を開発すること、そして女性の人権擁護のための相談機能を充実すること、なのである。

※1 バズセッション
6・6討議ともいう。6名程度の小グループで6分程度の話し合いをする。蜂の羽音（バズ）のように、各グループが話し合う集まり（セッション）である。

※2 KJ法
参加者すべてのどの意見も大切に扱い、集団で創造的に問題解決を図る問題解決法。

※3 スーパービジョン
相談員の対応について指導助言すること。

profile
広岡守穂さんプロフィール

1951年生まれ
中央大学法学部教授／佐賀県立女性センター・アバンセ館長

専攻は政治学。1991年ベストメン賞を受賞。『男だって子育て』1990年(岩波新書)・『女たちの自分育て』1998年(講談社)など著書多数。

◆『ささえあおう 子育てと自分育て』2003年(エポック10)・・・エポック10にて販売しています。◆

『学生と語る～女性教育論を学んで～』

昨年の秋、大学生が続けてセンターを訪れた。聞けば全員が早稲田大学の学生で『女性教育論』を履修し、「女性センター」見学が課題の一つになっているとのこと。ちょうどこの頃「区民企画講座」でもテーマとして「女性センター」に取り組んでいたので、このチャンスを逃すのはモッタイナイ！と座談会を企画した。また、この『女性教育論』を担当されている辻智子さんは共著で『女性センターを問う』という本も著している。こうして、この座談会が実現したのである。

◇参加者プロフィール◇

相宅 幽香（おおや ゆか）さん
早稲田大学教育学部教育学科１年

田村 樹里（たむら じゅり）さん
早稲田大学教育学部教育学科１年

坂本 力哉（さかもと りきや）さん
早稲田大学教育学部生涯教育専修１年

増田 佳世（ますだ かよ）さん
早稲田大学教育学部社会科社会科学専修４年

大学で「女性教育論」を学ぼうとした理由を考えてみると

増田 去年受けた辻先生の「家庭教育論」がとても興味深かったので、また辻先生の授業を受けたかった。

相宅 社会福祉主事の資格を取りたいので、そのためには必修だったから。また、女性に関する問題に今まであまり触れる機会がなかったので。

田村 自分は中学・高校一貫の女子校だったが、歴史的に女性のための教育とはどのようなものがあるか知りたかった。また、男女差別の問題に興味があったから。

坂本 「女性教育論」と「家庭教育論」という授業があり、「家庭」「女性」というのは、身近な感じがし、とっつきやすかったから。前期に「家庭教育論」を取ったのでそのまま同じ時間帯の授業を取った。また、自分にとってパートナーとなる女性について、学ぶのも必要だと思ったから。

坂本さん

講義の中で新しく発見したこと、気づいたこと

坂本 女性センターの存在はまったく知らなかったが、民間の施設があることも分かった。また、女性の歩んできた歴史を見る中で、いつの時代でも自分たちの力で切り開いていこうという女性のパワーを感じ、すごいと思った。

田村 私も女性センターの存在を初めて知った。それと保育付きの講座でお母さんたちがいろいろなことを勉強していることも分かった。また、レポートにも書いたが、性の多様性というテーマの中で「インターセックス・チルドレン」というものを知って驚いた。かなり高い確率で存在するのに、社会ではあまり問題になっていないと感じた。

相宅 講義の中で「男女差別」ということを取り上げた時に、私自身はあまり感じたことはなかったが、社会の中では「DV」とか職場での「男女差別」とか思っていたよりいろいろあることが分かった。

増田 ２点に絞って話すと、１点目は性教育のことで、思っていたよりも進んだ性教育が行われているということ。もう１点は、なぜ、わざわざ授業名の頭に「女性」がつくのかと思っていたが、女性史を学ぶと以前の教育制度には明らかに男女の差があることが分かり、「女性」をつける必要があったということを知った。

女性センターの印象、見学の感想は？どんなＰＲが必要か？

相宅 女性問題に限らずに男性向けの料理講座があったので意外だった。

田村 私も男性向けの講座があったのが意外だった。それと図書もある程度あるのに、利用者が少ないのには驚いた。もっと地域の人たちにアピールすればいいと思った。ただ相談が女性のみだったので、男性の相談も受けた方がいいと思う。それと働いている人たちも受けられる講座もあった方がいい。

増田 センターに入ってしまえば、職員の方たちの対応もよくて印象がよかったが、とても入りづらい雰囲気だった。いろいろな講座があるんだと思った。

増田 広報にも問題があるのかと思ったが、市のホームページにも載っているのに、みんながあまり興味ないように感じた。女性センターも本当に一度、入ってしまえばそれなりに使えるのに。

増田さん

坂本 自分は島根県出身なので、地元の女性センターを見学した。いろいろな講座があったが、特に印象的だったのは映画を観ながら交流しましょうという「金曜カフェ」というもの。とても軽いノリで参加できそうでいい。あまり堅苦しい名前がついていたりすると、皆が敬遠するのかなと思う。皆で交流してネットワークの拠点にしようという感じを受けた。

差別されたり、したりしたことは？

増田 学生まではないけど、社会に出てからかなと。だけど、辻先生の授業を受けて、差別だけど差別だと気づいてないだけかも知れないとも思った。例えば、名簿の問題とか。ただ、一般的にリーダーは男の子で補佐は女の子という話については、自分や友人のことを考えるとあまりピンと来ない。それと4月から先生になる友人もいるが、その人たちがどのくらい「ジェンダー」や「差別」のことの知識を持って教壇に立つのかなと思うと怖いと思う。

田村 私は三人姉妹なので、家庭の中でも特に男女の区別は意識したことはない。また、小学校は全員が黒いランドセルを持つところだったし、中高は女子校で、周りに男の子がいなかったので、「女だから～」と感じることはなかった。学校では毎朝、運針があったりして、女性らしさを求める教育もしていたようだが、自分は家庭に入るべきだとも思わない。むしろ自分の才能を伸ばして勉強も運動も頑張ろうという雰囲気が学校にはあった。だけど、年上の人との会話の中で『女の子だったら料理ができなくちゃね。』等と言われた時に、「女の子は家庭的」というイメージがあるんだなと思う。

自分の母親・母親世代に対するイメージの変化って？

田村 父は全く家事をしないので、PTA活動等を積極的にしていた母に対して家事がおろそかになるとあまりいい顔をしなかった。でも、母はあきらめないで続けてきたので母の意思も強かったんだと思った。それと最近、街で泣いている赤ちゃんを連れている女性を見た時には、もしかしたら父親が全く育児を手伝わないので、母親も赤ちゃんと二人っきりで疲れているのではないかと思うようになった。その場だけのことで決め付けてはいけないと思う。

田村さん

相宅 父の海外転勤が多かったので、母は仕事を続けられない事情だった。外国では生活環境が全く違うので、そこに適応するには母はかなりの苦労があったと思う。

相宅さん

増田 昨年、子育て経験者にインタビューという課題で母に話を聴いた。母は団塊の世代だが、仕事を諦めて専業主婦になった人たちが多い世代だと思う。また、子育ての時期に周囲にサポートしてくれる人もいなかったので、仕事を続けるのは難しかったのだと思う。今は続ける、続けないを選べる時代に生まれてよかったなと思う。母は近所に専業主婦が多かったこともあり、再就職の時期を逸したようだ。また、いろいろと趣味的な活動も活発に行っていた。お金を稼ぐことが全てではないが、やはり働いて収入を得ることと、習い事とかで忙しくしていることとは違うのかなって思う。

就職活動で「女の子」は大変という印象があるけれど・・・また「男の子」もイメージに縛られている？

増田 特に女の子だからということはなかったし、かえって内定が貰えなくても上手くいかなくても「まっ、いいか！永久就職で。」と冗談で開き直ったり、気分を紛らわせたけど、男の子の方が切迫した感じだった。女の子の方が上手く切り抜ける。
それと若い女の子の間では、男は優しくなきゃというのもあるし、女の子はかなりわがままでも許されて、男の子は大変ですよね。社会に出たらまた少し違うのかも知れないけど・・・。

この座談会は平成18年1月12日(木)に行ったものです。このページはその一部を抜粋して掲載してあります。

「女性教育論」担当　辻 智子さんから

辻　智子さん　プロフィール
早稲田大学・神奈川大学・千葉大学で非常勤講師。
教育学（社会教育学）・女性史を専門とする。

私が担当する授業を履修する学生はその内容に関心があるというよりは、どちらかというと消極的な理由で履修する者が多い。また、授業初頭に男女平等や性差別についての個々の考えを聞いても、これまでに不平等や差別を感じたことはほとんどない、という学生が多く、「昔の話」か「自分には縁遠いこと」、あるいは「女性たちの過剰な反応」として受け止めている。もちろん、中には「家での父親のあり方に疑問を持ってきた」「共働きなのに家事は母ばかり」「女の子は浪人する必要なしと言われた」等の個人的体験から強い関心を持って履修してくる学生もいる。

このような学生たちを前にして、私自身は以下の二点を重視した授業に取り組んでいる。一つは歴史や事実をなるべく丁寧に提示すること。もう一つは学生同士の活発な意見交換を促すこと。これらの作業を重ねることで、自分自身が今まで意識していなかった側面に目を向けるようになったり、「当たり前」と思っていたことに対して疑問を持つようになったりすることを狙いとしている。学問的蓄積を体系的に学習するよりは、どちらかというと当事者としての自分を意識して、自分の言葉で自分の感じたことや経験を語ることに比重をおいており、教育を専攻する学生に対する授業としてはとりわけ必要なことだと考え、ここ数年、実践してきた。
知れば知るほど、学べば学ぶほど悩みも深くなるのが、このテーマである。貴重な授業の機会を充分に生かせるよう、今後も学生と一緒に悩みながら考えながら授業をしていきたいと思っている。

2006年1月27日開催

『あなたの居場所はどこですか？～エポック10に寄ってみませんか～』

この講座はエポック・エンパワーメント講座の修了生が区民企画委員になり9回の打ち合わせを経て開催したものです。

第1部 基調講演

海老原さん

「居場所」としての女性センター　現代にひろがる身の置きどころの無さ

講師　海老原暁子さん(立教女学院短期大学助教授)

「歴史的に見てもちょっと前まで、女性にはなかなか居場所がなかった。その『居場所』をキーワードに、女性センターのあり方やセンターに何を求めるのかを考えていきましょう」と、4つの提言がありました。

- 国連婦人の十年以降、多くの自治体で女性センターができあがった。「箱物」との批判もあるが、（各自治体のセンターが地域限定で同じような機能で競い合うのではなく）得意の分野を育てていったらどうだろうか。そして、相互乗り入れできるようになったら、横につながり広がっていくのではないか。
- 現代は(特に若い世代ほど)女も男も現実を直視することを拒否し、自分の居場所を見つけにくい状況になっている。利用メンバーの固定化・高齢化が言われているが、センターが“窓”をつくり利用者を育てていくことが大切。よりよい運営の担い手もそうした中で生まれるのではないか。
- 何のために学ぶのか、これからの女性に必要なものは何なのかという教養を身につけられる場所であってもらいたい。（カルチャースクールとの違いはここにあり！）
- 自分の人生の流れをまた自分で作れる―リカレントな生き方ができる場であるように。前向きな人ばかりでなく、ひきこもりがちな人でも行きやすい多様な価値観を認められる場であってほしい。

第2部 トーク

司会の池上さん・有泉さん

エポック10を利用する区民によるトーク

乳幼児学級をきっかけに、自主グループをつくりその活動の中で平成4年のエポック10の設立当初から利用している矢口節子さん、数年前に九州から転居してきて昨年度はじめてエポック10講座を受講した浜園さん、スリングの正しい使い方の普及もしながら、エポック10で、若いお母さんと活動しているエンパワーメント・バースクラブのウィルキンソン有希子さんの3人がパネラーとなって、それぞれ「エポック10」に望むものを語りあいました。

「エポック10に来ると元気になれる」

移転後、地の利の悪さや設置構造上の問題を抱えるエポック10をいかに活性化させていくのか、と同時に、自分たちは女性センターでどうエンパワーメントしていくのか、ということを考えました。
パネラーからは「地方では想像もできなかったような充実した内容の講座も行われていることがあまり知られていないのは残念。」「インターネットの活用にも工夫が必要では？」「自分たちが活動を始める時にエポック10も味方になってくれた。」「世代を超えた交流をしていきたい。」「エポック10で出会った人たちから元気をもらった。」などの意見が出されました。その一方で「女性センターで学んだことを実生活に反映させることの難しさを感じている。」という発言もありました。
講座終盤には、会場からもたくさんの発言があり、参加者が自分自身の目線で考えられる講座になりました。

（記録担当：林 智子）

矢口さん・パネラーのみなさん・ウィルキンソンさん

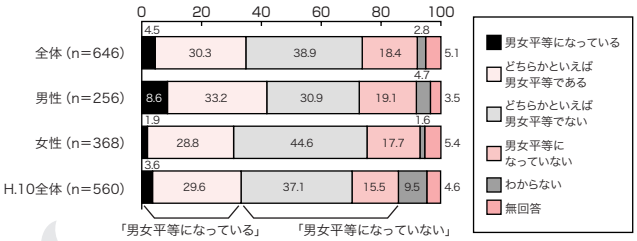
男女共同参画に関する住民意識は、平成10年と変わっている？

男女共同参画社会に関する実態や意識をお聞きし、今後の施策の参考とするため、区内満20歳以上の男女1,500名の方を対象にアンケートによる住民意識調査を実施しました。前回調査の平成10年と、どう変わっているのでしょうか？チョットご紹介します。※調査報告書は、男女平等推進センター・行政情報コーナー・区民事務所・図書館、区ホームページで閲覧できます。

★調査期間：平成17年8月4日（木）～8月22日（月）
★回収数：646人（男性256人、女性368人、無回答22人）
★回収率：43．1％
★調査内容：(1)男女平等意識　(2)家庭生活　(3)子どもの教育　(4)職業　(5)介護　(6) 人権
(7)地域活動　(8)女性の政策決定への参画などシステム変革　(9)区の施策の評価

●今の世の中は男女平等になっていると思いますか？

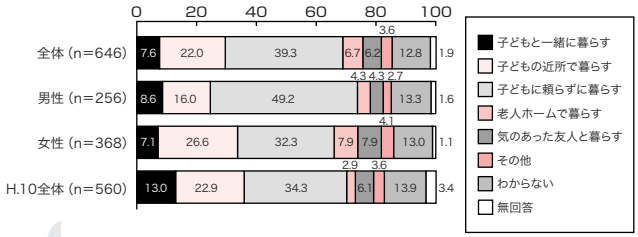
<今の世の中の男女平等の状況（全体・性別・平成10年調査比較）>



今の世の中の男女平等の状況は、「男女平等になっていない」と「どちらかといえば、男女平等になっていない」を合わせた『男女平等になっていない』が57.3%を占めています。
この結果については、平成10年調査と、大きな差異はみられませんでした。

●老後、どのように暮らしたいと思いますか？

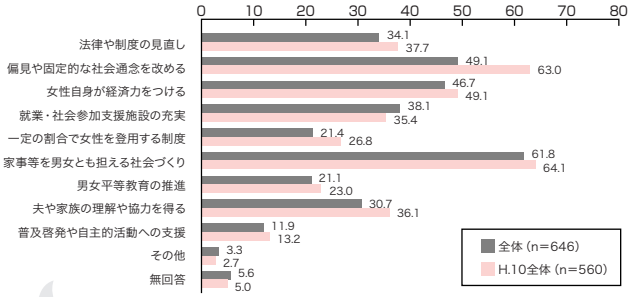
<老後の暮らし方（全体・性別・平成10年調査比較）>



「子どもに頼らずに暮らす」が39.3%と最も高くなっています。男性は「子どもに頼らずに暮らす」が49.2%で女性より16.9ポイント高く、女性は「子どもの近所で暮らす」が26.6%で、男性より10.6ポイント高くなっています。
平成10年調査では、「子どもに頼らずに暮らす」が34.3%と、今回5.0ポイント増えています。男性は「子どもに頼らずに暮らす」が44.0%、女性は「子どもの近所で暮らす」26.1%と、それぞれ、今回5.2ポイント、0.5ポイント増えています。

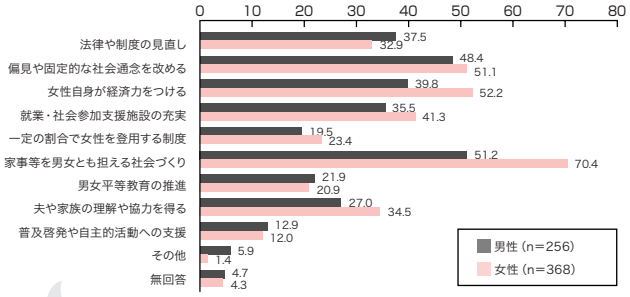
●男女共同参画社会実現のために、どのようなことが大切だと思いますか？

<男女共同参画社会実現のために大切なこと（全体・平成10年調査比較）>



「家事や育児、高齢者・病人の介護や看護を、男女とも担える社会づくりを進めること」が61.8%と最も高く、「女性をとりまくさまざまな偏見や固定的な社会通念・慣習・しきたりを改めること」(49.1%)と続いています。
平成10年調査では、「女性をとりまくさまざまな偏見や固定的な社会通念・慣習・しきたりを改めること」が63.0%で、今回は13.9ポイント減少しています。

<男女共同参画社会実現のために大切なこと（性別）>



では、性別により差があるものはなんでしょう。「家事や育児、高齢者・病人の介護や看護を、男女とも担える社会づくりを進めること」（女性70.4%、男性51.2%）、「女性自身が経済力をつけたり、積極的に知識・技術を習得すること」（女性52.2%、男性39.8%）となっています。
平成10年調査では、「家事や育児、高齢者・病人の介護や看護を、男女とも担える社会づくりを進めること」（女性68.8%、男性58.5%）、「女性をとりまくさまざまな偏見や固定的な社会通念・慣習・しきたりを改めること」（女性66.2%、男性60.0%）と続いています。「女性自身が経済力をつけたり、積極的に知識・技術を習得すること」は、女性54.7%、男性41.5%となっています。

◆◆ 男女共同参画苦情処理委員からのお知らせ ◆◆

区立中学校女子生徒の標準服について

豊島区男女共同参画推進条例に基づき、平成16年4月「区立中学校の女子の標準服に、スカートだけでなくズボンも選べるようにしてほしい」という苦情の申出が提出されました。
この苦情の申出に対し、慎重に調査・審議をした結果、平成17年2月、教育委員会に「女子生徒の標準服として、スカートとズボンを採用し、生徒・保護者の意思で選択できるように、平成19年度を目標に改善されたい」と意見表明を行っておりました。
この度、教育委員会より次のように改善する旨の報告がありましたのでお知らせいたします。

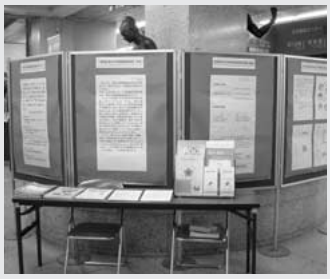
1 ズボンをはきたい女子生徒は、理由を問わず、中学校に問い合わせることができるようにし、平成19年度に向けた入学説明会で説明します。
平成19年度「学校案内」の各中学校の標準服の紹介欄に「女子生徒用のズボンについては、お問い合わせください」という趣旨の文章を入れる予定です。

2 教育委員会では、標準服のデザインは必ずしも変える必要はなく、各中学校においては、業者と連携を図り、スカートと同じ布地でズボンを作成できるように体制を整えておくことを指導しました。

■「男女共同参画都市宣言記念」ロビー展示

展示期間：平成18年1月5～17日

本庁舎1階ロビーに、宣言文をはじめ、男女共同参画推進条例、苦情処理委員制度、エポック10の紹介や、住民意識調査の概要などを展示しました。
エポック10運営委員の方々にも、パネルの作成、チラシ配布のご協力をいただき、2週間の展示を終えました。



※豊島区は、平成14年2月15日に「男女共同参画都市宣言」を行いました。

平成18年度　講座開催予定

女性のライフプラン講座（4月）
女性リーダー養成講座（5～7月）
区民企画・編集講座（9月・1月）
青少年向け講座（7月）/子育て講座（5月～6回）
中高年向け講座（9月・10月）
再就職講座（10月）/共催事業講座（1～3回）
男性向け講座（11月～12月）
男女共同参画都市宣言記念講演会（2月）
苦情処理委員制度啓発講座（5月・11月）
※詳細は、広報・ちらし・ホームページ等でお知らせいたします。

編集後記

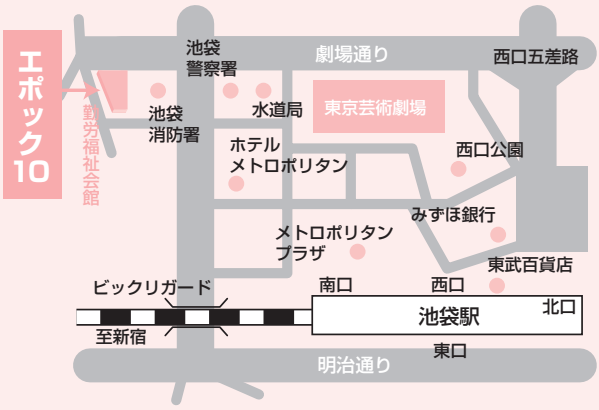
区民企画編集委員より一言

- 何もわからないまま参加しましたが、周りの方に助けられながら、いい経験をさせていただきました。（Hさん）
- 地域に根付いて歩みを進めている女性がいることに嬉しく、頼もしく感じました。これからも何らかの形で関わりたいと強く思いました。（Iさん）
- 学生との座談会や企画講座での話を通して、『次世代へつなげるセンター』という視点に出会えました。（Aさん）
- 23区の女性センターが地域で連携して講座運営をすることができると、センターの活性化と、人の交流にもつながるとあらためて感じました。（Yさん）
- 久々に頭を使い、若い人たちと交流し、いろいろな話を聞き、新鮮な日々でした。また、学んでみたいです。（H・Tさん）

エポック10相談室
TEL：03（3980）7830

- 一般相談は、開館日の午前9時～午後5時までです。
- 専門相談は、女性の医師、弁護士、カウンセラーが相談に応じます。
- 専門相談は予約制です。※どの相談も無料です。

相談名	曜 日	時 間
法律1	第1金曜日	午後1時30分～4時30分
法律2	第3金曜日	午後6時～9時
からだ	第2金曜日	午後5時～8時
こころ1	第2水曜日	午後1時30分～4時30分
こころ2	第4火曜日	午後6時～9時
DV	第3火曜日	午後1時～4時



豊島区立男女平等推進センター（エポック10）
〒171-0021
豊島区西池袋2－37－4
豊島区勤労福祉会館3階
TEL：5952-9501
FAX：5391-1015
Eメール：epoch@city.toshima.tokyo.jp

開館時間
月～土曜日の午前9時～午後9時と
毎月最終月曜日の前日（日曜日）の午前9時～午後5時
※ ただし、毎月最終月曜日・祝日は休館です。

〈発行〉豊島区
〈レイアウト・印刷〉株式会社 内田印刷所
〈挿絵協力〉大滝 希美さん